



巻頭言

散歩のすすめ

穴戸 健夫

晴れあがった日、子どもたちは園外に飛び出したい気持ちでいっぱいです。多くの園では、安全性を確認し合いながら、楽しい散歩マップを作っていて、子どもたちと散歩に出かけています。

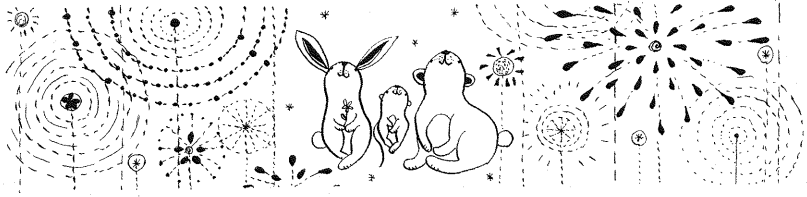
評判のアニメ『となりのトトロ』の主題歌「さんぽ」は、絵本『ぐりとぐら』の作者、中川李枝子さんの作詞です。

あるこう あるこう わたしはげんき

あるくの だいすき どんどんいこう

子どもたちは、散歩の中で、この歌を歌っています。

中川さんは、保母学院を出ると、小さな無認可の保育園で保母をしていました。そのころの思い出を、「私は保育園の子たちと、毎日のように近くの公園を散歩しました。十五、六人の子がふたりずつ手をつなぎ、住宅地の入り組んだ道を二〇分ぐらい



歩くのです」と書いています。

子どもたちは、「鳥かこの下がった家」「犬のいる家」「花壇のある家」に立ち止まって、観察するのが大好きでした。道端に子猫がいると子どもたちの口から「ちいさなねこ おおきなへやにちいさなねこ」と絵本の一節が、流れでるのです。

これは、保育者であれば、誰もが経験する散歩の風景だろうと思います。ここに、保育の原点があります。

行動がことばへ、ことばが行動へ

ところで、話が変わりますが、岡本夏木さんの『幼児期——子どもは世界をどうつかむか——』を読んだことがありますか。子どもにかかわる文化には、子どもたち自身がつくる「子どもの文化」とおとながつくって子どもに与える「子ども向け文化」の二つがある。後者は、今日ではコンピュータのソフトやゲームであったり、早期教育のための塾であったりして、その勢いは、「子どもの文化」を「空洞化」してしまっただけである、と言うのです。そして、「子どもの遊びと子どもの文化の空洞化は、幼児期そのものの空洞化につながります」と警告しています。

では、本来の「幼児期」とはどういうものか。岡本さんは、「幼児期では行動がことばへ、ことばが行動へと相互に翻訳され、確認されあうことによって、行動とこと



ばのそれぞれが、よりしっかりと生活の中に根づくこと」が大切なことであり、そしてまた、そのことは「認識の新しい発達を促す土台」を作っていくことになると思っています。

この「行動がことばへ、ことばが行動へ」という提案には、大いに共感するものがあります。

ずっと昔のことですが、まだ、参加者の少なかった日本保育学会（一九五八年）で、私を含めた五人で「話し合い」についての共同研究を発表したことがあります。その時は「話し合いから行動へ、行動から話し合いへ」が、私たちの提案でした。

今日のように情報産業が進んでいない時代でしたが、戦前のような「おとなが押しつける」保育でもなければ、そうかといって、子どもの自由だという「放任」保育でもない、第三の道を探究するという実践的な課題にぶつかっていました。それが、私たちの「話し合い保育」の提唱であり、子どもたちとの共同の探求的な保育への提案でした。

散歩は子どもの文化

ここで、もう一度、散歩に戻って考えてみましょう。散歩は、子どもたちの共同の「行動」です。子どもたちの楽しい「行動」として、改めて見直してほしいというこ



散歩は行動力を伸ばすばかりでなく、感性を豊かにします。四季折々の移り変わりに眼を向け、自然の美しさを感じ、自然への愛を育ててほしい、と思います。「自然環境の尊重を育成する」(子どもの権利条約39条)ことは、幼い時代からです。また、散歩は感性を育てるばかりでなく、知性を育てます。散歩で見つけた小さい花を「なんとという花なの?」と聞く。わからなければ、園に帰って図鑑で調べてみる。ここから科学する心が育ちます。

子どもたち同士で、それぞれの体験(散歩とは限らないのですが)を語り合うという楽しみも生まれます。「ダンゴムシ」に興味をもった子どもたちが、飼ってみようということになり、「ダンゴムシ」の習性をいろいろ聞いたり、調べたりして、わくわくするような好奇心を育てていきます。

そうした中で、さまざまな問題にも、たじろぐことなく挑戦し、みんなで力を合わせれば解決するのだ、という自信をもつようになります。

岡本さんの言うような「子どもの文化」も、ここから生まれるのではないでしようか。
(同朋大学)

参考文献

- 中川李枝子『絵本と私』福音館書店 一九九六年
岡本夏木『幼児期―子どもは世界をどうつかむか―』岩波新書 二〇〇五年
宍戸健夫『保育実践をひらいた50年』草土文化 二〇〇〇年